

# 光州

わがふるさとの五月は  
山つつじ野と山に咲きみだれ  
真紅の炎は天に燃えさかつて  
太陽を焦がし  
夜の闇に挑む季節。  
たぎる春の息吹は  
黄土の夢を掘りおこし  
むせかえる花の香に  
幼ない夢は  
光を求めて  
暗黒の野をはだして走る。  
青い空の下で

## 申 有人

古の詩人が錦繡江山と称んだ  
百済の花。  
たわわの穂が大地を金色で蔽い  
海の幸山の幸で天を祀る人々。  
和やかなことばと頬笑みが  
人のこころを厚く包んで  
大地に人間の夢を刻む。  
種子は芽ぶき紅い花で歴史を刺繡し  
た。  
東学農民革命で  
三・一独立運動で  
光州学生運動で  
四・一九革命で。

## はなしの自由席

### 落 選

#### 木暮真人

代議士木原実が落選した。あわれである。これにこりてもう選挙なんかやるな。詩を書くことなどにこだわって、それで政治家稼業をつづけようというのが、どだいふとい量見だ。コスモスの同人たちは寛容だから、同人中に代議士がいても、別にうさん臭い目で眺めることもなく過してきたが、本当は木原が代議士になったとき、除名にでもしておくのが至当であつたかもしれぬ。そうすればかれも詩などあきらめて、わいろをとることはあつても落選などは絶対にならない政治家に成長していったかもしれぬ。そこがあわれである。十三年余りも代議士をしていて、木原は地元で橋一本かけたことがないばかりか、大きな道路や空港をつくるという反対ばかりして、議員としては何の実績ものこしていない。

一九八〇年五月 光州で  
死の闇黒を不死鳥が羽搏く。  
「軍人がきたら殺してやる」  
闘うデモ隊に小石を運びながら  
幼稚園の小児が吠いた。  
紅い霧に包まれた夜の光州は  
燃えたぎる血が神話を呼ぶ。  
数えきれぬ虐殺体から噴きあがる血。  
学生 労働者 市民が  
老若男女 無差別に  
首から 胸から 背中から 腹から  
銃剣で刺し貫かれた  
朝鮮の種子。  
路面を紅く染めて  
熱い夢が流れる  
いとしい恨が流れる。

沈黙する夜よ  
聞かせてくれ  
異国に流離う  
血濁くものに。  
だれの銃剣で  
なぜ流されたか。  
闇の火照りで蘇る花の香よ  
おまえがかいま見た  
つかの間の眩しい光を。  
おまえの血で書いた  
人民の黙示録を。  
反乱の国 全羅道よ  
反逆の民 全羅道よ  
おまえは おれの青春  
おまえは おれの祖国。

— 80・7・10 —

そのくせ税金で選挙運動もやりたつぷりめしも喰ってきたというから、それではまるで、職を空しうしてただ庶民の血税をかすめ喰らってきただけではないか。それでいて政治はイヤだの、きいたふうな反政治詩をひけらかすとは、インチキもきまわれりだ。  
木原は議員として何の実績もないばかりかどうやらテキからもなめられていたらしい。聞けば、在職中、あれほど騒がれたロッキード社からも、マルベニからも、KDDからさえも、電話一本かかってこなかったそうさ。「それではおまえ、田中角栄以下じゃないか。よつぽどおまえはナメられていたんだなあ」というと、「そういえばそうだなあ」などと気のない返事をする。何ともあわれな小政治家である。

いままらいつても仕方のないことだが、友人木原実がマトモな政治家として活動し、万札入りの段ボール箱を十か二十、いつでも玄関先に積みあげていくれたら、さしずめぼくなども、それを通じて面白い「政治参加」の試みをしてきたかもしれぬとひそかに残念におもう。

そのあぶく金を資金に、ぼくはそこらへんの詩人たちを片っぱしから買取する。詩人づ

さつきの花も散つたな。  
梅雨曇りの風に揺れて  
葉緑の映える蔭で  
まだぼつんとしがみついているのもあ  
る。

ここいらが中之島公園の突端かな。  
八軒屋渡船場跡はほんの眼の先だが  
運ぶものを失くしたのはいつからだっ  
たかな。

天満橋の欄干越しに覗いた川面の  
舟着き場まがいにくぼんだ一角で  
一個のドラム罐が漂い浮かんでた。  
ここは淀川と寝屋川の合流点で  
すぐ土佐堀と堂島川に分岐する緩衝帯  
か。

俺は唐突に「国境」や「難民」の言葉  
を想った。  
流れに押されては岸壁に突つかえて  
にぶい反響のうめきをあげ弾じき返さ

れている。  
水面下に沈んでペンキの漂白された腹  
を

俺はみつめながら  
いま駅の円柱での号外で

選挙速報の自民党圧勝とあったのに  
やっぱりなあと反芻していた。

流れなどまるでないようだが  
ドラム罐はぶつかりながら

ちよつとずつせりあがつて川の真ん中  
へ

身じろいでいる。

こいつが運んでいるのは何だろうか。

やがて分岐点の右か左か

どっちの進路へ向って行くのか。

流れの向うにはめつきり高層ビルが増  
え

低い曇天のかすんだ街がある。

ねらわれる

西 杉 夫

すまを大きくとつたぬれ縁、  
壁に見せかけたふすま、  
広い天井には武者が身がまえ、  
大小のなぎなたが  
すぐ手のとどく位置に光っている。

使者の間、  
次の間、  
羅城の間、  
いく曲りもしたその奥に  
ねらわれる僧がひとりすわる。  
渦まく政治のどぶどろ

胸元めがけて突きだされるやいばの  
そのはげしさを全身でささえながら  
いまはただ軽く目をつぶる。

東寺観智院、  
なめらかな入母屋づくり。  
先頭にいた案内人は消えている、  
いつしよにいたはずの家族づれも。  
みがきあげられた廊下の

浮かびでた木目をふんで、  
さて出口はどつちだったか。  
仕かけのかさなりをすりぬけて  
見えない敵はすぐ近くにまで迫ってい  
る、  
血が四方にとびちるときが  
もうそこに。

ポケットにはたしかにある、  
京都駅西側二階、  
こみあうなかをようやく見つけたロッ  
カーのカギ。

これをさしこみさえすればいい、  
午後5時29分発東京行ひかり26号、  
9時には郊外電車のなかだろう。

時間をもういちどたしかめてから  
わたしは出口を必死にさがしはじめる、  
物音はない、  
僧は動かない、  
そのまま夕闇のなかにとけこんでいく。

らをさらしている連中ほど買収に弱いことは  
御存知の通りだ。主知派もモダン派もプロ派  
も、ひとたび権力の流れが変わると、一夜に  
して身を売って権力讃歌のコーラスに投じた  
ことのある経験から推しても、それはむつか  
しいことではない。こんどはばくがその先取  
りをするという寸法だ。詩人づらにさらす詩  
人たちを買収し供応して、政治優位の現実を  
を体現してみせるというの、たのしい「政  
治参加」ではないか。

ただそうすると、浜の真砂ほどいる詩人の  
なかで、買収の対象にもならない連中や供応  
にありつけない連中は、やつかみもふくめて  
ごそごそ騒ぎだすだろう。なかには、署名運  
動などをはじめ、  
「文化買収罪」を制定せ  
よとか、「詩人供応罪」をつくれとかいいだ  
すやつもでるだろう。そんな法律などつく  
たところで、いまの選挙法と同じで、買収す  
る側には何の痛痒も感じないが、雑多な詩人  
の政治的チエなどというものはそんなところ  
だろう。それでも騒ぐことに意味がある。世  
の中すべて弁証法的にうごくというあかしぐ  
らいにはなるだろう。そうなればせめてもの  
なぐさめだ。つまり政治家木原のマトモな活  
動であつめたワイロの集積が、それだけの結

果をうみだしたとすれば、これまた弁証法的  
にいつて、木原はリッパな政治家であつたと  
いうことにもなるのだが。

いろいろの金を集めもせず、やりもせず、何  
の実績ものこさないうえに、ぼくだつておも  
いつていどの弁証法的政治術さえ身につけ  
ていない男が、選挙で落ちたとしてもふしぎ  
ではない。小政治家木原よ、せめてこれから  
は雑多な詩人の一人として、「文化買収罪」  
や「詩人供応罪」の制定運動でもやって、十  
三年間の税金タダ喰いの罪ほろぼしをするこ  
とだ。

萩原恭次郎全集 第二卷

それは近く出る。この八月末に半分くらい  
二校が終っている。第二巻はまず初期詩篇と、  
それ以前の短歌が漏れなく拾集されている。  
『死刑宣告』の恭次郎は、その以前に歌人萩  
原葉歌時代があり、つづいて抒情詩の時期が  
あつたことを綿密に知った上で、はじめてわ  
れわれは大正のアパンギャルド恭次郎を考え  
ることが出来る。

その彼の全集第二巻が、すぐ間近い。  
静地社刊 コスモス社に申込まれよ!

## 独りの常連

宮田 正平

髪はまっ白だが  
それと目につく猫背が  
年よりもずっと老けて見せるが  
高級になれずじまいの官僚の出か  
教育者でもあったのか  
いささかくたびれてはいるが  
きまって背広を着ている  
(一見して安い代物ではない)  
ネクタイはなぜか締めていない  
黒いビニールの袋を下げて  
いつものように背をまるめ  
静かに店に入ってくる  
酒とビールとウイスキーと  
煙草のけむりのいりまじった  
噓せかえるような臭気のなかで  
もうできあがった常連どもが  
チラと一瞥をくれるだけ  
誰も声をかけない  
彼も会釈しない

無言のままカウンターに  
二百十円を置く  
カミさんが金を受けとると  
コップに酒をつぎ  
一袋二十円の焼のりを渡す  
小さな数枚の海苔をつまみに  
ゆっくりゆっくり飲む  
けつして二杯と注文することはない  
肴を追加することもない  
常連の話に耳を傾けず  
隣りの客に話かけることもせず  
飲みおわると  
来たときとまったく同じに  
ひっそりと店を出る  
常連はそれに気づかず  
猥談と上司への不平不満が  
狭い店をてんでに飛び交う  
その喧嘩をはねかえすように  
カミさんが  
(「マイドオーキニー」)  
その声を背に  
きょうも 独り  
横断歩道をわたる

## 国境地点

山野 チエ

その日、ペンジケント見学のために  
ウズベク共和国から真直ぐに延びる  
一本の道を、タジク共和国に向かっ  
て車を走らせていた。やがて道の両  
側に広がる桑畑や葡萄畑の姿が消え  
広々とした所に出た。そこがウズベ  
ク共和国との国境だった。人影は全  
くなく、標識だけが建っていた。  
この地点を結ぶ国境線は、ユーラシ  
アの地図にはなく、アジア主要部の  
地図にははつきりと描かれてある。  
くねくねと複雑に屈折する国境線の  
一点に立って眼に映るかぎりを眺め  
ると、川は一方の国から他方の国に  
流れ込み、足下の草は越境して影を  
別の国に落としていた。

## 和地海岸

河合 俊郎

南のはての水平線に豆つぶほどのタンカー  
あたりは波音ばかり  
海岸線の遠くでクレーンが上下し  
岬の方へブルトラーザーが移動していく  
立札がある  
和地海岸線 五キロメートル  
護海工事 責任者 株式会社 川口組  
昭和五十四年施工  
公益事業優先の名のもとに  
見渡すかぎりの砂浜にテトラポットを並べた  
幼い日の背中を乾した白い砂原は暗く  
真夏の太陽のきらめきの中を  
一羽の鷗が風に流されて消える  
錆びた鉄屑 電線  
コンクリート滓 空罐  
強い地下茎のハマヒルガオさえ黄色に  
枯れはてる

# 流れる

高島 洋

朝 豪雨をつけて出勤すると  
やはり下水処理場は水位異状の警報ブザーが鳴っ  
ていた  
流入計は時間当り一五〇トンをしめしている  
調整池は満水 二台のポンプが必死で攪伴槽に水  
を送っている  
沈殿池はと見ると、汚泥ゾーンがしだいにせり上  
っている  
直ちに攪伴機のスイッチを切る  
攪伴槽の汚泥が沈下して、上水だけが沈殿池に流  
れる  
沈殿池の汚泥はエヤーアップで返送パイプを流れ  
て回収される  
だが、これで汚泥ゾーンのせりあがりをとめるこ

# 白い挨拶状

和田英子

〈夏至近い日〉  
旧仮名づかい  
おぼろ月夜の記念切手の  
譜面に時間がゆれる  
会社を退くひとの  
白い挨拶状は  
もがれた蝶の羽だ  
〈四散〉  
迷彩の残る社屋に  
憶測みだれとび  
空のリング箱が  
山積みされる  
主力移転

とははできない  
汚泥の溢流を防ぎきれぬ筈はない  
降雨がとまらない  
流入水の圧力が依然としてつづく  
ついに汚泥が溢れはじめた  
滅菌池から放流口へ  
今迄透明なキラキラ光る水が流れていたのに  
忽ち褐色の水に変わる  
褐色の水が川に流れ出る  
すでに川は造成地の赤土を含んで赤銅色の水が流  
れている  
汚泥の水は、それにまぎれこんで流れる 流れる  
× × ×  
傍観している  
すると とつぜん 昨夜の講演会講師の言葉がわ  
たしの脳裏に聞こえてきた  
最近わたしは恐怖を感じだしている  
コンピューターによる人民の管理をつよめる  
過程

女子職員全員残留の中で  
出雲なまりの命令を無視し  
いちはやく  
ひとりすりぬけて  
赴任したひと

〈ゆれるエレベーター〉  
傷いえた  
フェニックスは  
はばたき  
翼は高層ビルをおおう  
昼夜分かたない  
無影灯の下  
あなたの  
異例な管理職昇進は  
国際婦人年の付随行事であったか  
異常気流に逆らい  
かろうじて保つ  
バランス感覚の産物か

たとえば

原発の労働者として働く人々の適否  
原発反対を叫んで抗議にくるあの顔やこの顔  
がどこのだれであるか

コンピュターは直ちにはじきだす

それは全国民総背番号制へと発展してゆくで

あろう

その言葉が目の前汚泥の水と同じ速さでみるま  
に流れてゆく

コンピュターをあやつりながら、おのれの排泄

するものも始末できない現代

× × ×

雨はやんだが、水勢はすぐには弱まらない

どのくらいの汚泥が流れたらどうか

それをバキューム車で運搬廃棄したものとして

経営者にかわって

ふとわたしは頭のなかでソロバンをはじいている

赤黒い汚泥の流れをみながら

〈思ひ出〉

トパーズが似合う

眉の濃いひとの

思ひ出は

夜光虫の点滅

残業のあと

襟をたてて待つ

停留所の

腕をとり馳けおりの

砂浜の

街角の抱擁

おもいをつらぬき

やじりを定める

四條烏丸生まれ

赤坂局消印の

書状に匂う

仮死

なのはなばたけに

いりひ うすれ

かもしかの耳。

## 走れなかったS

砂川は最初の戦場だった。

朝も 昼も 夜も。

ナパーム弾を積んだ

アメリカの爆撃機が

ベトナムに飛ぶ。

農地を

農民をふみにじる

米軍基地拡張に怒って立った

農民のなかに

支援に集った人々のなかに

彼はいたか。

機動隊に突かれて

血まみれに倒れた人々のなかに

彼はいたか。

あずさみ天神の境内で

タイマツ燃やして誓いあった。

人々のなかに

少年の彼はいたか。

砂川にアメリカの爆撃機が墜落し

砂川が機動隊でまっくろにとりかこまれ

砂川に青年の家ができ

反戦塹壕ができたとき

根っこになって働いた

かもしかのような彼。

通夜の夜。

息子はいつも走って生きた

と白髪のお父さん。

たたかいのなかで殺される彼だと思った

と親友が絶句した。

すらりと伸びた彼の足。

もう 走ることのない 彼の

時間がすばやく

すぎ去った。

深く 暗い

都会の下水道工場の

マンホールのなかで 待っていた。

クレーンに吊るされて

ユックリユックリ 下りてくる筈だった。

コンクリートの塊りが

彼を襲ったのだ。

砕かれた 楽天家彼の肉体。

彼は

ルパシカのよく似合う若者だった。

素足で 若草をふむ。

## 野口清子